

# 北タイ，メーホンソン県における山地民と 森林との関わりに関する研究

川瀬 祐介\*・野元 世紀\*\*

## 1. はじめに

かつて、タイ王国は「森の国」と呼ばれ、1961年には国土の57%が森林に覆われていた（田坂，1991）。しかしその後、森林は急激に減少し、王立森林局の“Forestry Statistic 2000”によれば、1998年には森林の国土に占める割合は25%にまで落ち込んでいる。このような状況の中で、タイ政府は森林の減少を防ぐために1989年に「森林伐採禁止令」を出した。政府は森林の商業的伐採と同様に、山地民による焼畑も急激な森林減少の主因と考え、この禁止令には焼畑の禁止も含まれている。

北タイは盆地が多数分布する山岳地域で、その山地斜面には本来、焼畑を生業としてきた山地民と呼ばれる少数民族が多数居住している。2003年の統計によれば、その数は約92万人に達する（Preve, 2006）。これはタイ国民の約2%にあたる数である。後述するように、山地民は北西部のミャンマーに近接するメーホンソン県やチェンマイ県、ターク県に集中している。一方、東部のラオスに接するナン県やウッタラディット県は山地民の希薄な地域である（図2参照）。

北タイはタイ国の中では森林の保存状態が良く、70年代前半には全体で70%近い森林面積率を保っていた。しかし、70年代後半から80年代にかけて北タイでも大きく森林面積は減少した（Nomoto, 2003）。ただし、山地民の集中するメーホンソン県やチェンマイ県、ターク県では現在でも高い森林面積率を維持している。大きく森林を失った地域は山地民の希薄なナン県やウッタラディット県などの諸県である（図1参照）。70年代以降の急激な森林面積の減少に、はたして山地民が大きく関わっているのか疑問である。むしろ森林減少の影響を受けた被害者であるかもしれない。

焼畑禁止令によって当然山地民の暮らしは変化したと思われる。また、周囲の森林の減少によって生活に影響が出ているかもしれない。そこで聞き取りによって山地民の現在の状況を明らかにすることを試みた。聞き取りの内容は、①現在の生業は何であるか？②焼畑は環境悪化を引き起こしたか？③周囲の森林（環境）に変化は起こっているか？を基本にし、メーホンソン県の8つの山地民の村で実施した。北タイの山地民に対する聞き取り調査は、文化人類学の観点からかなり行われている。たとえば、カレン族に関しては飯島（1977）や速水（2007）などの研究が、ミエン・ヤオ族については吉野（1998）、モン族については鈴木・安井（2002）、シャン族については村上（1998）、高谷（1998）、リス族については綾部（1998）などの研究があり、多くの成果が出ている。しかし、同じ質問を異なる複数の山地民族に行い、まとめた研究は無いと思われる。

## 2. 北タイの山地民（山岳少数民族）

第1図はタイにおける県別の森林面積率の変化を示すものである（Nomoto, 2003）。1973年には北タイ（県番号の1から14）の多くの県で森林の保存が良く、高い森林面積率を保っている。この地域は盆地と山地で構成され、最北端にはデーラオ山脈が東西に走り、ミャンマーのシャン州との境をなしている。西部にはドーナ山脈が南北に走り、その西はミャンマーである。東部のラオスとの国

\* 名古屋市立吉根小学校    \*\* 岐阜大学教育学部

境沿いにはルアンプラバン山脈とこれに続いてペッチャブーン山脈が南に延びている。これらの山脈が走る諸県で特に森林面積率が高くなっている。メーホンソン県の森林面積率は100%であった。一方、1995年には北タイの東部で急激な森林面積率の減少が確認できる。ナーン県では1973年には90%を占めた森林が、1995年には47%に減少している。しかし、ドーナ山脈の走る西部のメーホンソン県やターク県では高い森林面積率が維持されている。そして、ここに多数の山地民が居住している。

第2図は北タイにおける山地民村落の分布を示す(増野, 2005)。タイにおける山地民の中で、カレン族がその半数近い約44万人を数える。図からも圧倒的にカレン族の村落が多いことがわかる。起源は諸説あり、黄河上流あるいはゴビ砂漠から移動してきたと言われている。生業は焼畑である。モン族の村落も図中に多数みられる。モン族の人口は約15万人で、タイの山岳少数民族の中ではカレン族に続き2番目に人口が多い。モン族の起源はモンゴルであるという説がある。中国では「苗族」と呼ばれている。他の山地民より高所に居住する傾向がある。生業は焼畑である。メーホンソン県にはラフ族の村落も確認できる。人口は約10万人である。「ラ」とは虎のことで、ラフ族は虎狩り民族という意味である。起源はチベット高原で、かつては、山岳地帯に棲み山羊などを遊牧しながら、採集と狩猟生活をしていたと言われる。リス族もメーホンソン県に多く居住している。人口は約4万人で、起源は四川省からチベットであると言われている。リス族も他の山地民より高所に住み、焼畑を生業としている。カレン族、モン族、ラフ族、リス族などはシナ=チベット語族に属し、この地域への移住は比較的新しく、19世紀以降である

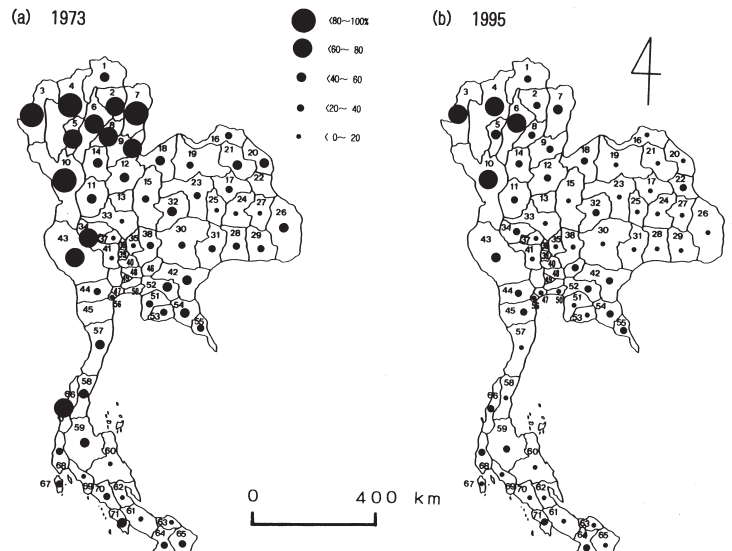
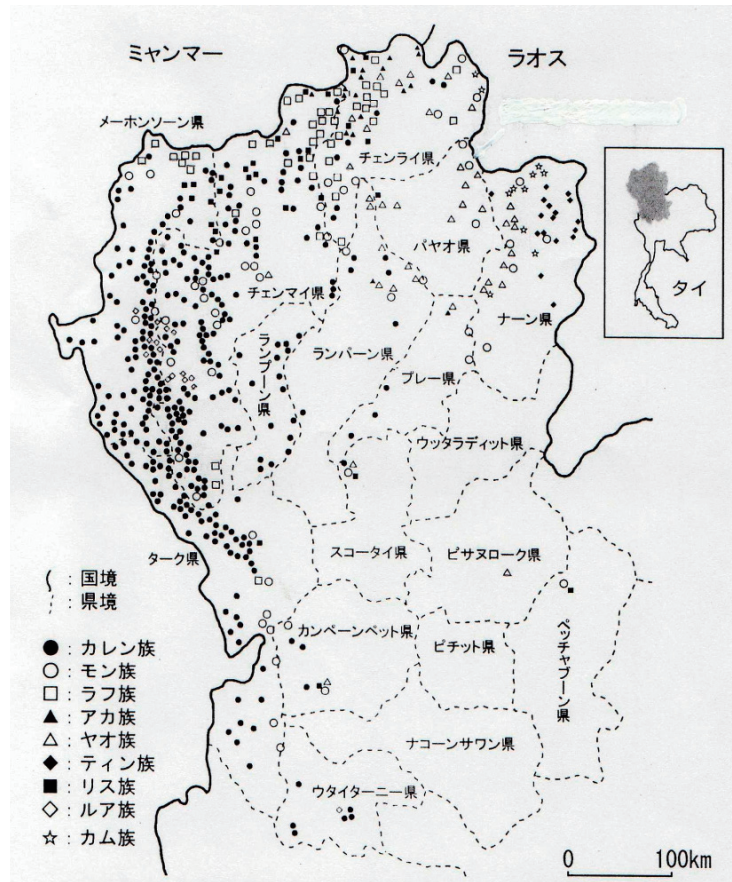


Figure 1: Thailand's forest cover percentage by province in 1973 and 1995. Prefecture No.: 1. Chiang Rai, 2. Payao, 3. Mae Hon Son, 4. Chiang Mai, 5. Lamphun, 6. Lampang, 7. Nan, 8. Phrae, 9. Uttaradit, 10. Tak, 11. Kamphaengphet, 12. Phitsanulok, 13. Phichit, 14. Sukhothai, 15. Phetchabun, 16. Nong Khai, 17. Kalasin, 18. Loei, 19. Udon Thani, 20. Nakhon Phanom, 21. Sakon Nakhon, 22. Mukdahan, 23. Khon Kaen, 24. Roi Et, 25. Mahasarakham, 26. Ubon Ratchathani, 27. Yasothon, 28. Surin, 29. Suisaket, 30. Nakhon Ratchasima, 31. Buriram, 32. Chaiyaphum, 33. Nakhon Sawan, 34. Uthaithani, 35. Lop Buri, 36. Singburi, 37. Chainat, 38. Saraburi, 39. Anthing, 40. Ayuthaya, 41. Suphan Buri, 42. Prachin Buri, 43. Kanchanaburi, 44. Ratchaburi, 45. Phetchaburi, 46. Nakhon Nayok, 47. Samut Sakhon, 48. Pathumthani, 49. Nonthaburi, 50. Samut Prakan, 51. Chon Buri, 52. Cha Choeng Sao, 53. Rayong, 54. Chanthaburi, 55. Trat, 56. Samut Songkhram, 57. Prachuap Khiri Khan, 58. Chumphon, 59. Surat Thani, 60. Nakhon Si Thammarat, 61. Songkhla, 62. Phthalun, 63. Pattani, 64. Yala, 65. Narathiwat, 66. Ranong, 67. Phuket, 68. Phangna, 69. Krabi, 70. Trang, 71. Stoon

第1図 タイにおける県別の森林面積率の変化



第2図 北タイにおける山地民村落の分布 (出典: 増野高史(2005))

と言われている (Perve, 2006, Tribal Museum, 2004)。また、わずかであるがラワ (ルア) 族、ティン族、カム族の村落も第1図に分布している。これらの民族はオーストロアジア語族に属し、シナチベット語族よりもはるかに長くこの地域に居住している。

### 3. メーホンソン県での聞き取り調査

2007年8月と2008年9月にメーホンソン県で聞き取り調査を行った。2007年ではカレン族 (ホワイト・カレン)、モン族、シャン族、ラフ族の村を、2008年にはシャン族、パオ族、カレン族 (ホワイト・カレン)、モン族の村を訪ねた (第3図)。聞き取りの仕方は、聞き取りの内容を英訳したものを通訳に伝え、それを通訳が山地民族語に直して村人に伝えた。また、聞き取り調査を始めると、現在も焼畑が行われていることが分かった。タイ政府は、定住している場合は焼畑とは認識しないようである。さらに、出稼ぎも日常的に行われ、低地との交流も盛んであることが分かった。そこで①村の過去・伝統文化、②生業・焼畑、③森林の変化・周囲の環境の変化、④近代化



第3図 聞き取り調査の地点

を聞き取りの内容とした。以下、調査結果である。なお、調査村の緯度、経度、高度はGPSによる測定値である。また、第3図の升目の一片は約30キロである。

#### 3-1 カレン族 (ホワイト・カレン) [調査場所：N19° 04'28.9" E98° 01'08.0" 高度872m]

##### 1) 村の過去・伝統文化に関して

調査を行ったホワイト・カレンの村の世帯数は14世帯で戸数は7戸、村民は40人であった。宗教は現在キリスト教を信仰しており、37年前にアニミズムから改宗した。基本的には自給自足の生活で、朝・昼・晩ともに米を中心とした食生活をしている。生活用水は近くの山の水源から水を無料で引いている。現在は水道が通っているが、昔は竹を組み合わせて引いてきていた。

昔からホワイト・カレンは同じ村の同じ民族同士で結婚していたが、現在はタイ語があらゆる民族に広がってきているため、結婚の形も変わりつつある。また、伝統的なカレン族の結婚は、花嫁が花婿の家族にお金を払い、結婚の許可を頂くという儀式がある。

先祖はアニミズムであったが、今はキリスト教に改宗しているため、祭りなどはクリスマスなどキリスト教の祭りを行っている。しかし、宗教はキリスト教になったが、文化はアニミズムの頃のまま変えたことがない。

高地に住む理由は、昔から他民族との戦争を避けるために、高いところに住んだ。移住生活をしてきたときは、アニミズムであったため、移住先は木の神様など宗教的なポイントを重視して決めていた。

## 2) 生業・焼畑に関して

現在も焼畑を行っている。作物は米、カボチャ、トウモロコシを栽培しており、米が栽培する作物の80%を占めている。米は陸稲で、すべて焼畑で栽培している。しかし、移住型の焼畑耕作ではなく、今は家を定住させ、農地を7年周期で移動させていく形態をとっており、これによって森林は再生され、守られている。

焼畑耕作の作物カレンダーは、2, 3月→木を伐る, 4月→火を入れる, 5月→苗を植える, 10, 11月→収穫 となっている。また、休閑期の11～1月には街へ出稼ぎに行き、残った者で家畜の世話をするようにしている。

現在、他の山岳少数民族との直接的な関わりはないが、政府の人たちとの関わりはあり、森林局の人たちが生活状況をチェックしに来ている。この森林局の人たちのせいによって、伝統的な移住生活ができなくなり、農業や狩猟といった仕事が減ったため、森林局の人たちについてはあまり良く思っていない。

## 3) 森林の変化・周囲の環境の変化に関して

この村の周辺では、森林に変化はなく、動物・植物・昆虫もあまり変化していない。日常的な川の水量、雨の後の川の流出量に変化はない。異常気象の年でも、山の上では、干ばつや洪水の影響はほとんど受けないため問題はなく、焼畑の森林再生によって、この村の周辺は環境が保護されているため、多少の異常気象では問題はない。しかし、最近は気温が上昇し、暑い期間が長くなり、雨季には激しい雨が多くなった。今はキリスト教であるため森に精霊は住んでいるとは思わないが、森林を大切に生活を送っている。

## 4) 近代化に関して

食生活は、基本的には自給自足で伝統的な食事をしているが、15～20年くらい前から出稼ぎや森林局の人たちとの関わり、また低地の街へ行く機



写真1 カレン族の家屋

【家屋は山の中にひっそりと建っている。戸数は7戸と少なく、固まってというよりはまばらに建っているという印象を受けた。】



写真2 カレン族の家屋2

【家屋は高床式になっており、下で靴を脱いで家の中に入るようになっている。主に竹を使った家で、床なども竹を敷き詰めて作ってある。】

会が増え、お菓子なども入ってきている。農業についてもトラクターは使っていないが、化学肥料は使うようになってきている。また、言語や衣服が低地の人（タイ人）のようになってきているが、女性の衣服は伝統的な服のままである。ホワイト・カレンの女性の服は、白い服であると未婚者であり、青や黒い服を着ていると既婚者を表す。

### 3-2 モン族の村 [調査場所：N19° 06'03.9" E98° 02'03.9" 高度1,275m]

#### 1) 村の過去・伝統文化に関して

調査を行ったモン族の村の世帯数は56世帯であるが、一夫多妻の文化であるため、村民は約400人の大きな村である。宗教は仏教とアニミズムのミックスで、アニミズムの文化も守られている。基本的に自給自足の生活であり、朝・昼・晩ともに米を中心とした食生活を送っている。また、狩猟も行っている。生活用水は近くの山の上にある水源から有料で水を引いている。

30年前は10km離れた山の上に住んでおり、それまで移住生活をしていたが、今は定住している。30年前に住んでいた所では、近くにカレン族が住んでいたが何にも問題はなく生活していた。この場所に定住しようと決めたポイントは車道もあり、低地とのアクセスが良かったためである。他の山岳少数民族との関わりはあり、時々来るのは全く問題ないが、文化が違うこともあり、嫌な思いをするときもある。

先祖から伝わる冠婚葬祭や年中行事は今でも続いている。例えば、お正月に着飾り祭りをするという独自の文化の祭りも残っている。高地に住んできた理由は、山の上は低地と違い、モン族にとって快適であるということが大きな理由である。山の上が快適であるため、低地に行くと気温などの違いから体調を崩してしまうこともある。

#### 2) 生業・焼畑に関して

作物は主に米とキャベツを栽培しており、米は陸稲で焼畑耕作を行っている。カレン族と同様、定住型の焼畑耕作で、農地だけを移動・サイクルさせて森林を守っている。移住型は20年前には少し行っていたが、10年前には完全にやらなくなった。定住するようになってから、キャベツやジャガイモなどの換金作物を栽培するようになった。作物カレンダーは陸稲が、2, 3月→木を伐る, 4月→火を入れる, 5月→苗を植える, 10, 1月→収穫となっており、キャベツは1年に2回作り, 6~8月, 9~11月に栽培する。

#### 3) 森林の変化・周囲の環境の変化に関して

モン族の村の周辺では、森林は少しずつ減少しているが、動物・植物・昆虫の変化はあまりないようだ。雨の後の川の流出量も、この村では問題がないほどの変化であるが、近くの村では増水の問題もあるという。大きな村であるため、乾季の終わりには水不足になるなど、水に関しては生活上の大きな問題を抱えてはいるが、農業の面では問題はない。異常気象についても、山の上であるため干ばつや洪水の被害もほとんどない。近年、気温の変化はほとんどないが、乾季が長くなったと感じており、環境の変化は多少なりともあるようだ。仏教とアニミズムのミックスで、アニミズムの精神もしっかりと受け継がれているため、森に住んでいる精霊を敬い、森を大切にしてきた。

#### 4) 近代化に関して

食生活には大きな変化はなく、伝統的な自給自足で生活している。しかし、近年、政府の教育向上のためのプロジェクトや出稼ぎで低地の人びとと関わりを持つようになり、低地の街からお菓子などが入りやすくなっているため、若者を中心に食生活は少しずつ変化してきている。

農業では、換金作物であるキャベツやジャガイモには常に化学肥料を使うようにしているが、米に

は異常気象で化学肥料が必要である時以外は、化学肥料は与えていない。また、トラクターも使っていない。低地の人たちとは30年くらい前から関わるようになり、家族の中の男一人が出稼ぎに行くようになっている。しかし、雨が降るとすぐに戻って来る。低地の人びととの関わりによって、衣服や言語、音楽などタイ人の文化が入り込み、若者を中心に文化は大きく変化してきている。



写真3 モン族の家屋

【伝統的な作りをした家屋。中は土間のような空間が占め、奥には寝室と思われる部屋がある。寝室には段差があり、靴を脱いで上がるようになっている。】



写真4 モン族の村周辺のキャベツ畑

【村のすぐ近くの山では広大なキャベツ畑を見ることができる。キャベツの他にもジャガイモ、米なども山の斜面を利用して栽培されている。】

### 3-3 シャン族の村 [調査場所：N19° 30'34.4" E97° 55'13.0 高度1,082m]

#### 1) 村の過去・伝統文化に関して

調査を行ったシャン族の村の世帯数は30世帯で村民は300人の大きな村であった。この場所は、他にもモン族、パオ族が同じ集落で住んでおり、民族ごとに分かれて居住はしているが、3つの民族が共同で暮らしている。他民族との関係は仕事や生活上の問題もほとんどなく、お互いを尊重しあって生活している。しかし、結婚は同じ民族同士とするのがほとんどであり、他民族と結婚することは滅多にない。

宗教は仏教を信仰しており、3つの民族ではシャンとパオが仏教、モンがアニミズムを信仰している。基本的には自給自足の生活であり、朝・昼・晩ともに米を中心とした食生活を送っている。生活用水は集落の近くにあるダムから無料で水を引いてきており、山岳少数民族を支援するための援助金が国から出ている。

先祖から伝わる祭りは現在でも捨てずに続けている。例えば、雨季に雨の恵みを受けるためにロケットを飛ばす祭りや、4月にブッダから様々な恩恵を得るため男の子が髪を剃り着飾る祭り、また水かけ祭りなど先祖も仏教徒であることから、仏教に関わる祭りを続けている。

先祖はミャンマーの低地で住んでいたが、現在は高地に定住している。20年前にミャンマーの軍事政権に追われ、国境を越え移住してきた。居住地は当時のタイ政府に指定された場所である。

#### 2) 生業・焼畑に関して

シャン族は焼畑は行わない。作物は主に米(6~10月)とゴマ(7, 8月)を栽培しており、ゴマは換金作物である。米は食料として水稲耕作を行っている。この集落は海拔1000mを超える高度にあるが、シャン族はもともと低地で暮らす民族であり、古くからの低地での水稲耕作の技術を山岳地帯でも活用している。

#### 3) 森林の変化・周囲の環境の変化に関して

村の周辺では、森林の変化もなく、今でもキノコや木の実など森の恵みを受けている。周りの木に関しても、住居などで使用する以外はほとんど伐ることはなく、森林は守られている。森林の変化がないため、動物・植物の変化もない。しかし、農地では殺虫剤を使うようになったため、虫は減ってきている。

日常的な川の水量の変化はない。昔は水を近くの川から得ていたが、今はダムから水道を引いている。ただし、年によって水量が異なるため、水は計画的に使っている。雨の後の川の流出量も、近くの大きな川では増水するが問題はなく、また村を通る川では大きな変化はない。山の上であるため、干ばつや洪水などの異常気象にも影響されることもほとんどなく、洪水はあっても川のすぐ傍の稲が持っていられる程度で、水位が上がっても大きなダメージを受けることはない。それでも、3、4月には山火事が多くなり、4、5年前から気温が高くなってきたなどの環境の変化は感じている。

仏教徒であるため森に精霊がいるとは思っていないが、昔から森林と共生しており、森林からの恵みを受けているため、森林を大切にしている。

#### 4) 近代化に関して

食生活に大きな変化はなく、伝統的な自給自足の生活をしている。しかし近年、低地への出稼ぎや低地で開催される祭りへの参加、市場への買出しなどにより調味料（味の素など）が低地の街から入ってきており、食生活は少しずつ変化している。

農業では、異常気象の年には化学肥料を使うが、通常は使っていない。また、トラクター（クボタ）は使用している。低地の人々とは3、4年前から仕事や祭り、市場などで関わるようになり、特に若者を中心に衣服・言語・音楽などタイ人の文化が入り込み、あらゆる文化は変化してきている。



写真5 シャン族の家屋  
【高床式の家屋が多く屋根は葉で作られている。】



写真6 シャン族の村の水源  
【村落から1kmほど離れた山の上に生活用水として用いられるダムがある。】

### 3-4 ラフ族の村 [調査場所：N19° 33'10.5" E98° 12'34.2" 高度728m]

#### 1) 村の過去・伝統文化に関して

調査を行ったラフ族の村の世帯数は67世帯で、村民は270人の比較的大きな村である。宗教はアニミズムであり、昔から続けている習慣として、12日に1日は完全休日になっている。この休日では、働かず、生き物も殺してはいけない。この習慣を続けなければ何かが変わり、病気などの不幸が起こると考えている。

生活用水は近くの山の上にあるダムから無料で引いてきている。基本的に自給自足の生活であり、朝・昼・晩ともに米を中心とした食生活を送っている。野菜などは季節に応じて、その時に採れたも

のを食べている。

30年頃前までは2, 3年ごとに移住をしていたが, 政府が定住を強要するようになり, 26年前にここに住んで以来, 定住生活を送っている。移住生活をしていた時の移住先のポイントは, 1つ目は農業環境に優れている場所, 2つ目は占い師の判断によって移動していた。アニミズムを信仰しているため, 占い師の役割は大きい。

他の山岳少数民族との関わりはあり, シャン, レッドラフ, リス族とはすぐ近くに村があるため, 祭りなどに参加したりもしている。この村のラフ族はとても友好的であり, 他民族との関係もお互いの文化を尊重し合っているため何の問題もなく, 逆に良い関係を築いている。

ラフ族は昔から男女関係が厳しく, 男女2人で家の中で会うことは禁止され, 必ず家の外で会わなければならない。また衣服は, 伝統的な衣服を全員持っており, 今では全部を伝統的な衣服で揃えるという訳ではないが, 一部は必ず身に着けている。山の高地で暮らす理由として, 1つ目は先祖代々, 高地で暮らしているため, 暮らし方を熟知しているためで, 2つ目は低地よりも高地の方が快適で, 低地に行くと体調を崩しやすくなってしまうという理由がある。

## 2) 生業・焼畑に関して

焼畑を行っている。作物は主に米, カボチャ, トウモロコシ (豚の餌), 大豆, ゴマを栽培しており, 2000頭の豚を山に放し飼いにし, 現金収入のために飼育している。米は陸稲で定住型の焼畑耕作を行っており, 農地を移動・サイクルさせ森林を守っている。また昔はケシを栽培し, 薬として吸っていたが, 20年前から減少させ, 10年前には完全に栽培をやめた。

## 3) 森林の変化・周囲の環境の変化に関して

村の周辺では植物の生態に変化が起こっている。例えば, 昔はマンゴーの花がたくさん咲いていたが, 今では少ししか咲かなくなった。また, ランの花が1週間は咲いていたのが, 1日で散ってしまうこともある。さらに, 今までは少しの面積でまかなえたものが, 生態の変化により大きな面積を必要とするようになり, 木を伐る量が増加している。それにより, 森林は年々減少しているが, ラフ族の人々ができることは, 政府に不満を言うことと, 森にいる精霊に祈ることしかできない。また, 森林の減少だけでなく, 気候や動物にも影響が及んでいる。10年くらい前から気温が上がったと感じている。そのため焼畑耕作の木を伐って火を入れる時期がわからなくなってしまった。野生動物もニワトリ, サル, ヘビ, ネズミなどはまだ見ることができるが, 野生のブタは集落の増加により, 絶滅してしまっている。

村が山の上にあるため, 干ばつや洪水の被害はないが, 異常気象が頻繁に起こっているため, 農業において作物カレンダーのズレが生じている。また, 近くの川は乾季になると水がなくなってしまうため, 水を遠くまで汲みに行かなくてはならない。雨季には地すべりで水が一気に流れ出てしまい, 近くの低い場所にあるシャン族の村などでは大きな被害が出ている。

## 4) 近代化に関して

昔は全て森の恵みから食材を得ていたが, 今では街の市場に買出しに行き, 少数が出稼ぎに行くようになり, 低地の食材が混入し食生活に変化が起こっている。また, 現金収入として飼育している豚を売るようにもなった。

農業では化学肥料もトラクターも使っていない。ずっと長い間, 低地のシャン族と関わりがあり, 特に若者は学校もシャン族と一緒にいるため, シャン族の文化が浸透してきている。若者を中心に文化は変容してきているが, 年配のラフ族は先祖から伝わるラフ族の文化を維持している。





写真7 ラフ族の家屋  
【高床式になっており、下で靴を脱いで家に上がる。】



写真8 ラフ族の楽器  
【精霊を呼ぶときに使う楽器。】

### 3-5 シャン族の村 [調査場所：N19° 31'56.2" E97° 55'46.6" 高度946m]

#### 1) 村の過去・伝統文化に関して

調査を行ったシャン族の村の世帯数は150世帯で村民は5,600人の大変大きな村であった。また、低地に出稼ぎに行っているため、正確な人数は分からずもう少し多いかもしれない。この村では周辺にカレン族、モン族の村があり、違う民族同士の結婚もあるが、基本的には言語も違うため、住むところは別々になっている。他民族とは伝統的な文化が異なるが、付き合っていく分には問題はなく、良い関係を築いている。

宗教は仏教を信仰しており、仏教に関するお祭りが年に4回行われる。昔はアニミズムであったため、森の精霊は信じている。基本的には自給自足の生活をしており、朝・昼・晩の食事は米が中心で、その時ある食材を食べるのが基本である。主な作物は水稲、ニンニク、大豆を栽培している。ニンニクは換金作物として栽培しているが、近年ガソリン代の高騰により、チェンマイからの買い付けがなくなってきている現状がある。大豆は発酵させ、年中食べられるよう保存してある。

シャン族は古くから水稲耕作を営んでいるため、移住生活は行っていないが、ここの村の人々はミャンマーでの戦争が原因で、30年前にタイへ移住してきた。もともと低地で生活する民族であるが、タイ政府が指定した場所が高地であったため、今の場所で生活している。高地でも水稲耕作ができる平らな土地であれば問題はない。

生活用水は政府が作った小さなダムから水道を引っ張り使用しているが、一家族で1ヶ月60バーツほど支払っている。

#### 2) 生業・焼畑に関して

水稲耕作を営んでいるため、焼畑耕作をしていない。しかし、水稲耕作をするための最初のフィールド作りは木を伐り、燃やして水稲耕作に必要なフィールドを作り上げた。燃やしたときの煙で空気は悪くなるが、雨でリセットされるため、環境破壊の原因だとは思っていない。8年前からニンニクを換金作物として栽培するようになった。大豆は霧が多いため育ちが悪く、商品にならない。ケシは昔からシャン族は栽培していない。フラットな場所では育たないのが一番の理由である。

#### 3) 森林の変化・周囲の環境の変化に関して

30年前、村の周辺は村民が100人程度だったこともあり森が豊富であった。しかし、村が徐々に大きくなったこともあり、木を多く使用するため、森は豊富ではなくなってきている。例えば、竹や家などに使用する木は30年前であれば簡単に近くで確保することが出来たが、10年20年経つにつれて難しくなっていき、今では遠くまで探しに行かなければ取れなくなっている。植物・動物・昆虫などは昔とほとんど変わりなく生息しているが、ホタルの数が激減しており、昔はたくさんのホタルを見ることができたが、今ではほとんど見るができない。

政府から森林使用の制限を受けており、1年で一家族あたり10本の竹しか伐ってはいけないとされている。これは食べるにしても道具に使用するにしても同じ本数である。

日常的な近くの川の水量は年々減ってきており、以前は主流のほかに支流も流れていたが、今では乾季には主流だけになってしまう。しかし、山地であるため雨の後の洪水は無く、少しずつ水量が増えるだけである。

周辺の環境の変化については、今は夏（3～5月）がとても暑くなり、期間も長くなっている。また、そのしわ寄せで冬（11～1月）が短くなってきている。また、暑くなってきていることで、昔は取ることが出来なかった茶を栽培することが出来るようになり、換金作物としている。

#### 4) 近代化に関して

10年前に村の前に低地を結ぶ道路が建設され、頻繁にコンタクトが取れるようになった。このことにより食生活は大きく変化してきている。昔は調味料は塩だけを使用していた。今では低地から多くの調味料を手に入れることができ、オイスターソースやゴマ油などを使用するようになった。また、言語や衣服にも変化が生じている。言語はシャン語とタイ語が混合し、衣服も昔は伝統服を村民全員が持ち、村行事では必ず着ていたが、今では村行事でも着ることは無くなり、中には家に無い人もいる。

低地への出稼ぎも行っている。行き先としてはチェンマイ、メーホンソンが大多数を占めるが、なかにはバンコクへ行く人もいる。出稼ぎへ行く人は主に若い男性で、女性は村に残り、家の仕事を行う。しかし、雨季になると稲作の仕事があるため、ほとんどが村へ帰ってくる。

農業では化学肥料を使用するようになったが、最近では環境のことを考え、有機栽培を学び、実践しているところもある。化学肥料は人にも有害であることも一つの理由である。



写真9 シャン族の水田  
【村の下には広大な水田が広がる。】



写真10 茶  
【近年取れるようになったという。】

### 3-6 パオ族の村 [調査場所：N19° 30'43.5" E97° 55'12.7" 高度1,056m]

#### 1) 村の過去・伝統文化に関して

調査を行ったパオ族の村の世帯数は30世帯で村民は200人の村であった。そのうちの3割が低地へ

出稼ぎに行っている。この村の周辺にシャン族とモン族の村があり、関わりを持っている。しかし、この2つの民族への対応は異なる。シャン族とは民族間での結婚もあり、友好的な関係を築いているが、モン族とは文化が異なり、嫌いではないが民族間の結婚は絶対がない。

宗教は昔から仏教を信仰しているが、基本的にはアニミズムとのミックスであり、森にはたくさんの精霊が住んでいると信じている。朝・昼・晩の食事は米が中心で、時間は決まっておらず、お腹がすいた好きな時にそこにある物で料理する。

15年前にミャンマーからタイへ来た移民であり、村周辺では特に新しい移民であるため、農作業を行うための土地を所有していない。森を切り開き、農地を確保したいが、政府から禁止令が出ているためできない。したがって、作物を栽培することは出来ず、近くに住むシャン族やモン族の畑で農作業の仕事を手伝い、働いて賃金を得て生活している。また、農地を借り、農作業を行っている村民もいる。牛を飼育しているが、農地を持たない生活であるため、食用にしかならない。

ミャンマーに居た時の主な栽培作物は陸稲、ゴマで、ゴマも換金作物としてではなく、自分たちの食事のために育てられていた。他には森で採れる栗など採集も行ってた。パオ族の移住のポイントとしては、①古い師が良い場所だと感じた所というアニミズム的な考えと、②米が良く育つ場所であるという農業に関する考えが一致した場所に移住する。しかし、15年前の移住はミャンマーの軍事政権から逃れるためである。昔から高地で暮らしてきた主な理由として、先祖から陸稲を行っているため水稲耕作の仕方が分からない。

生活用水は水道が通っていないため、毎日近くの川まで歩いていき、バケツで運んでいる。隣り合わせにあるシャン族、モン族の村では水道が通っているが、使わせてもらえない。

## 2) 生業・焼畑に関して

ミャンマーに居た時、パオ族は焼畑耕作を行っていて、そのための儀式も行っていた。森林再生のため農地をローテーションで使い、焼畑を行っていたため、環境破壊の原因だとは思っていない。ミャンマーでの暮らしは自給自足の生活であったが、今はシャン族やモン族の手伝いで賃金を得ているため、生活は苦しい。そのため、森から竹やキノコ類や栗などを採り換金している。

## 3) 森林の変化・周囲の環境の変化に関して

パオ族の村周辺の森林は減少してきていると感じている。特に料理など火をおこすときに必要な薪が少なくなってきた。植物・昆虫の変化は少ないが、動物に関しては、昔はよくサルやブタを見ることができたが、今では見るのが難しくなっている。

森林使用に関して政府から制限を受けており、昔ほど簡単に森林を使用することが出来なくなっている。しかし、政府が言う制限の詳細がよく理解できず、建材などのために木や竹を伐ってしまっている。

日常的な川の水量は年々減ってきており、以前は3、4月の水量が多かったが、今では少なくなっている。雨の後の増水も、山の上であるため洪水などの被害も無く、少しずつ水量が増えていくだけである。

周辺の環境の変化については、夏（3、4月）の気温はほとんど変化がないが、冬（11～1月）の寒さに変化が生じている。近年では、寒いときと寒くないときの繰り返しが起きている。しかし、農地を所有していないため、こうした環境変化に対して農業形態が変化してくるという実感は持っていない。

## 4) 近代化に関して

タイへ移住してきて以来、賃金を得て生活するようになり、昔は狩猟によって動物を捕まえ食用に

していたが、今では市場で買っている。また農業に関しても、シャン族やモン族に貸してもらった農地では化学肥料を使用している。

低地への出稼ぎは、3年前から多くの村人がメーホンソン、チェンマイへ行くようになっている。出稼ぎへ行く人は結婚していない若者で、年寄りや家族を持つ人は行かない。多くの人々が出稼ぎへ行くようになった大きな理由は、学校へ行くようになりタイ語が喋れるようになったことが大きい。それまでは言葉の壁が存在し、少数の村民しか出稼ぎへは行っていなかった。しかし、低地へ出稼ぎに行っても低地の人との友好的な関係はない。また、低地への出稼ぎにより、3年前から言語、食事、衣服、音楽など低地の人々のものが多く入ってきている。しかし、伝統服はほとんどの村民が所有しており、村の大きな行事（結婚式、祭りなど）では着用し、行っている。



写真11 パオ族の家屋



写真12 栗

【森から採ってきた栗。食用の他、換金もしている。】

### 3-7 カレン族 (ホワイト・カレン) [調査場所：N19° 04'28.9" E98° 01'07.6" 高度898m]

#### 1) 村の過去・伝統文化に関して

調査を行ったホワイト・カレン族 (パカヨー) の村の世帯数は7世帯で村民は35人というとても小さな村であった。この村の周辺に同じホワイト・カレン族の村があり、深い関わりを持っているが、他民族との関わりはあまり無い。他民族との結婚ももちろんないが、友好的には問題はない。

宗教は、昔はアニミズムであったが、現在はキリスト教を信仰している。これはこの村がもともとミャンマーからの移民であり、ミャンマーがイギリス領であったため、キリスト教へと改宗したという経緯がある。キリスト教であるため、森の精霊は基本的にはいないと思っている。しかし、根底にはアニミズムの精神が根付いて、森の精霊には敬意を示している。現在、村で行われる祭りは、森の精霊を祀るというアニミズムから伝わるお祭りを年に2回、クリスマスやニューイヤーを祝うキリスト教のお祭りを年に2回行っている。

日常の食事は、基本的には自給自足の生活である。朝・昼・晩の食事は米中心で、その季節で採れるものをおかずとして食べている。主な栽培作物は陸稲、トウガラシ、カボチャ、キュウリ、フルーツなどがあり、全て同じ場所で栽培している。また、鶏、豚、牛、水牛を飼育している。陸稲の作物カレンダーは、3、4月に木を伐り、4月に木を燃やし、6、7月に稲を植え、11月に収穫をする。収穫後はフリーとなり、特に何もしない。

この村では10~15年くらいの周期で移住していた過去を持ち、その移住先のポイントは農業に適し

ている土地（水が得やすい、働きやすいなど）だという。また、ホワイト・カレン族は、母親が亡くなると家を壊すという風習があり、結婚をするときは女性が男性の家にお金や豚をプレゼントする。また、結婚していない女性が白い服を着ているため、ホワイト・カレンと呼ばれている。

生活用水は近くの山の湧水を竹で作った水道を引いて、村に運んでいる。昔から山の高地で暮らしてきた理由としては、低地は暑いが高地は過ごしやすいという意見と、キノコ類などの採集にも高地は便利であるという意見があった。

## 2) 生業・焼畑耕作に関して

この村のホワイト・カレン族は、山の斜面で焼畑耕作を、水平な場所で水稲耕作を行っている。ただし、水平な場所が少ないため、水稲耕作の規模は小さい。焼畑耕作は農地を6つに分け、1年ごとに畑を変えていき、6年で一回りする方法をとっている。5、6年で畑は森へと戻っていくため、焼畑が森林破壊の原因だとは思っていない。農業形態も昔からほとんど変わってはいないが、近くのホワイト・カレン族の村では換金作物としてトウモロコシを栽培するようになった。また、ケシは一度も栽培したことがない。この村の換金物は水牛で、1年に1、2頭売ってお金にしている。

## 3) 森林の変化・周囲の環境の変化に関して

この村の周辺では森に変化はなく、今でも豊富である。しかし、他の地域では変化してきていると感じている。また、森から得る木材や竹を換金することはなく、全て自分たちの生活のために使用している。植物・昆虫の変化はほとんど感じないが、動物については豚（猪）や鹿が昔は多く生息していたが、今では少なくなっている。

政府から森林使用の制限を受けており、少し前まで1つの農地しか使用が認められていなかった。しかし、今は6つの農地に使用の許可が下り、サイクル方法が可能となった。農地以外の森林を伐ることはできないが、キノコ類などの採集はできる。しかし、森林使用の制限による生活への影響は大きい。

日常的な川の水量に大きな変化はなく、山の湧水なども豊富である。また、雨の後の洪水被害もない。水量は急に増えることはなく、徐々に増えていくだけである。周囲の環境の変化については、気温や森林、農業に関して変化は感じていないが、動物の減少は感じている。

## 4) 近代化に関して

この村の食生活に大きな変化は見られず、今でも調味料は塩だけである。また、農薬も一切使用せず、全て人の力で農業を行っている。これは6つの農地を1年ごとにローテーションさせているために実現できる。1つの農地を毎年使い続けていれば農薬を使用せざるを得なくなるが、農地をローテーションで使用することによって、森に戻すことが可能になり、農薬は必要なくなる。

低地への出稼ぎは15年前から行っており、低地の人との関わりはある。出稼ぎに行く期間は11、12月の収穫終了から2月の終わりまでで、男性のみが行く。また、若者が学校へ行くようになり、低地の人との関わりが深くなっているが、文化も違うため友好的ではなく、結婚もない。ただ、学校へ行っていなかった年配者はずっと山で暮らしたいと思っているが、低地の学校へ行きだした若者は、街に出たいと思っている。



写真13 カレン族の家屋（高床式）

写真14 水牛  
【年に1、2頭売り、現金を得る。】

### 3-8 モン族の村 [調査場所：N19° 06'04.1" E98° 02'03.3" 高度1,333m]

#### 1) 村の過去・伝統文化に関して

調査を行ったモン族の村の世帯数は60世帯で村民は600人の村であった。モン族は昔から一夫多妻制であるため、1世帯あたり平均10人の大家族で村には多くの子どもがいる。この村の周辺にはシャン族の村があり関わりがあるが、文化が異なるためフェスティバルやイベントなどを一緒に行うことはない。以前は関わりを持ちたくないくらい嫌悪感を抱いていたが、今は友好的で問題ない。

宗教は、今では仏教が入ってきてはいるが、大部分はアニミズムを信仰している。そのため、森の精霊には大変敬意を払っている。モン族は6、7年ごとに移住をしている。移住した場所では森の精霊に供え物、生贄などを差し出し、祀ったりもする。移住するときのポイントとして、一番重要視するのは農業に適した土地（気温、水源など）である。モン族の伝統的な祭りは12月にあり、村民全員で伝統服を身にまとい、伝統楽器を奏で、ゲームやダンス、料理、酒を楽しむ。

日常の食事は、基本的には自給自足の生活であり、朝・昼・晩の食事は米中心で、その季節で採れるものをおかずとして食べている。また、朝・昼・晩という区別はなく、お腹が空いたときに食べる。主な栽培作物は陸稲、トウモロコン、キャベツであり、鶏や豚を飼育している。昔からモン族はケシ栽培が有名であり、多くのケシを栽培し、多くのお金を手に入れることができたが、政府からのケシ栽培の禁止を受け、20年前からケシに代わる換金作物としてキャベツを栽培するようになり、10年前までにケシ栽培は完全に姿を消した。

今ではモン族の畑地のほとんどがキャベツ畑である。キャベツは植えてから3ヶ月で収穫できるため、3つの畑地に分け、1ヶ月ごとに植えることで毎月収穫できるようにしている。また、キャベツが栽培できる期間は雨季だけである。陸稲の農業カレンダーは2月に木を伐り、3、4月で火を入れ、6、7月に稲を植え、11、12月に収穫をする。農業用水は雨水だけに頼っており、生活用水は山の湧水を利用し、水道を通して村に引いてきている。

高地に住む理由は、ケシは昔からモン族にとって重要であり、高い土地ほど良質なケシが育つ。また、空気がきれいで農業に適しており、良い環境であるため長生きができる。高地ですべて暮らしてきたため、低地での暮らし方がわからない。

#### 2) 生業・焼畑に関して

この村のモン族は、焼畑耕作のみを行っており、焼畑によって木が少なくなっていると感じている。その理由として、換金作物をケシからキャベツに代えたことを挙げている。昔は少量のケシで多くの賃金を得ることができ、そのお金で鶏や豚などを購入することができたが、今では大量のキャ

ベツをチェンマイへ出荷し、現金を得ているため、キャベツ畑を拡大し、多くの木を伐ってしまっている。

### 3) 森林の変化・周囲の環境の変化に関して

移住してきた30年前にはこの村の周辺では豊富な森に囲まれていた。村が大きくなり、キャベツ畑を拡大していったことにより、今では森が減ってきてしまっていると感じている。また、植物・昆虫はあまり変化がないが、動物は昔と大きく変わった。20年前まで村周辺ではトラも見ることができ、猿、豚、鳥（ホービュー）などもたくさんいたが、今ではトラは姿を消し、他の動物も少なくなっている。

政府から森林使用の制限は2年前から受けており、政府の調査が村に入り、農地を決められ、それ以外の森で木を伐ることは禁止である。その影響で、2年前までキャベツのオーダーがたくさんあり、収入も多かったが、今ではオーダーが減り、収入も不安定になっている。

日常的な川の水量に大きな変化はなく、山の湧水なども豊富である。また、雨の後の洪水被害もない。水量は急に増えることはなく、徐々に増えるだけである。周囲の環境の変化については、気温や雨量、農業形態も変わらない。

### 4) 近代化に関して

この村では食生活に大きな変化は見られず、調味料（オイスターソース、ナンプラーなど）が低地から入ってきてはいるが大きなイベントでしか使わず、普段は塩だけである。換金作物が大部分を占めるため、畑では農薬を使用しているが、作業は人の力のみで行っている。

低地への出稼ぎは、農地が大きいと多くの働き手が必要であり、少数の若い男性しか行かない。そのため、低地の人との関わりは出稼ぎよりも、20～25年前からキャベツを売るようになってから多くなった。しかし、イベントや祭りなどで交流することはなく、嫌ではないが文化が違うため、友好的な関係は築いていない。

若い人たちは学校へ行くようになり、低地の人とも友好的で、伝統的な歌などが歌えなくなったという。低地の人との交流でも、文化（家屋なども）は変わらないが、フィーリングが大きく変わった。また、年配者の中にもチェンマイでキャベツを売るようになってからは、低地の人への抵抗感がなくなった。



写真15 テレビ

【テレビや車がある家庭がほとんどである。】



写真16 陸稲

【キャベツ畑よりは規模が小さいが陸稲も多く栽培されている。】

#### 4. まとめ

聞き取り調査の結果をまとめると以下ようになる。

##### 【村の過去・伝統文化に関して】

- 15～30年前くらいまで移住生活を送っていたが、今は定住している。特にミャンマーの軍事政権から逃れるために移住してきた経歴を持つ民族が多い。
- 宗教はアニミズムだけ信仰しているというよりは、キリスト教や仏教とのミックスが大半である。
- 民族の伝統は守っている。

##### 【生業・焼畑に関して】

- 農業は、シャン族以外は陸稲耕作（焼畑耕作）を営み、商品作物を栽培している。
- 6年サイクルで農地を利用する方法を採り、森林再生を図っている。
- 森林再生を考えて耕作しているため、焼畑耕作が森林破壊の原因だとは思っていない。

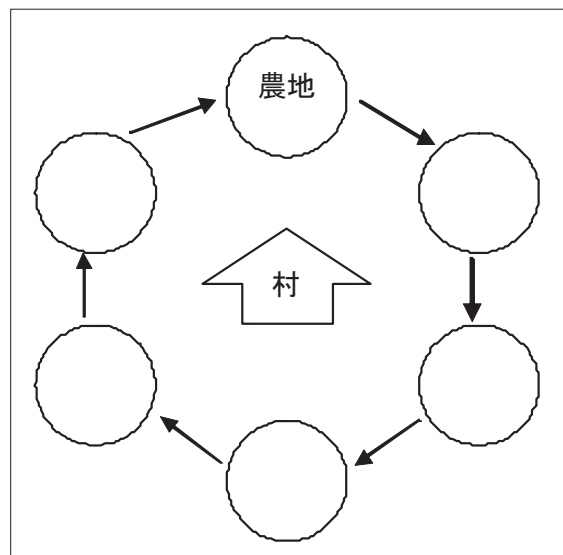
##### 【森林の変化・周囲の環境の変化に関して】

- 森林も周囲の環境も変化していないという村と森林が減少し、動物なども見られなくなってきていると感じている村があった。
- 政府から森林使用の制限を受けており、森の恵みを得られなくなってきている。
- 近年、気温上昇が起こっている。

##### 【近代化に関して】

- 多くの村が農業休止期間を利用して低地へ出稼ぎに行っている。
- 山地内への道路建設で低地とのコンタクトが容易になり、伝統文化は失われつつある。
- 若者は学校へ行くようになり、低地の人との関わることで、言語・食事・衣服に変化が生じている。

調査を通して感じたことは、ミャンマーからの難民が多いことであった。そのため、タイ政府から指定された土地での生活であるために、本来の生き方ができない状況にある。また、本来消えたはずの焼畑が、山地民の間では現在でも日常的に行われていることにも驚きを覚えた。多くの山地民は第4図のような6年サイクルの焼畑である。



第4図 調査村が用いる6年サイクルの焼畑方式

焼畑地での植生の回復の調査を行った鈴木・竹田・フラマウンティン (2007) や Fukushima (2007) によると、休閑5年目では大半がタケで占められ、木本の生長にはさらに長い休閑期間が必



要である。北タイの北に近接する中国雲南省西双版纳（シップソンパンナ）の焼畑を調べた尹（2000）によれば、安定した焼畑を行うには13年以上の休閑が必要である。筆者の一人である野元は1986年から1993年にかけて、西双版纳で局地気象の観測を続けた。焼畑地（基諾族）でも気象観測を行ったが、その折、焼畑地では切り株が残されていた（写真17）。聞き取りを行うと、切り株を残すのは森林の回復を図るためであった。また、栽培作物は自給用で、休閑期間は13年であるとのことであった。

北タイの山地民は、森林保護法などにより、著しい土地の利用の制限を受けている。その様な中での6年サイクルの焼畑は植生の回復をめざし、環境悪化を防ぐ山地民の知恵であると思われる。しかし、5年の休閑期間では植生に回復には不十分な時間である。また、山地民族間で貧富の差が大きいことも聞き取り調査を通して感じた。焼畑による栽培作物も、市場に出す商品作物がかなりを占めていた。農業的土地利用に切り株を残すことは不都合である。西双版纳、基ノ族の焼畑で見られた切り株を残す方法は、ここでは確認することができなかった。北タイの北西部は今も森林が残り、多くの山地民が暮らしている。この6年サイクルの焼畑を続け、さらにそれが広がっていけば、森林の減少、土地の荒廃が進む可能性も感じた。



写真17 西双版纳，基ノ族の焼畑  
【焼畑地には森林の回復を図り、切り株が残されている。  
1989年1月白坂蕃氏撮影】

## 5. おわりに

東南アジア山間地域から雲南省南部にかけて、民族の棲み分けがはっきりしている。低所はタイ族が、山地では多数の山岳少数民族が居住している。山地民は山でしか生きていくことができない。そのため、森との共生関係をもつ生き方をしてきた。北タイは近年まで森林の保存状態が良く、それがために商業伐採の基地になった（田坂，1991）。森林消失を防ぐために森林保護法が制定された。これによって著しい森の利用が制限され、山地民は森との共生関係を逆に放棄せざるを得なくなった。山地民は明らかに被害者である。聞き取り調査を通して、今も山地民は森を守る意識が強いことを感じた。しかし、生活をする上で、加害者にならざるを得ない状況もあることが分かった。また、低地の人びととの交流も盛んで、特に若者のメーホンソン、チェンマイさらにバンコクへの出稼ぎも活発である。今後、山地民と森との関係は、この点からも変わっていく可能性がある。

本研究を行う上で、カセサート大学農学部Sayan教授、森林局メーホンソン高地ステーションのGunさん、Eidさん、Swanさん、山地ガイドのGeorgeさんにお世話になった。特に、複数の山地民族語を操るGeorgeさんの存在は大きかった。彼がいなければ調査を進めることはできなかった。

本稿は、平成21年1月に岐阜大学教育学研究科に提出した川瀬祐介の修士論文、「北タイにおける民族のエスニシティの混合と森林変遷との関わり」の3章の部分を加筆修正したものである。他の章に関しては別の機会に報告したい。

## 参考文献

綾部 真雄（1998）：国境と少数民族 一タイ北部リス族における移住と国境認識一，東南アジア研究，35巻4号，

171-196

- 飯島 茂 (1977) : 東南アジア社会の原像 —その文化人類学的考察—, 東南アジア研究, 15巻3号, 334-346
- 尹 紹亭 (2000) : 「雲南の焼畑 —人類生態学的研究—」, 農林統計協会, 240p
- 鈴木 基義, 安井 清子 (2002) : ラオス・モン族の食糧問題と移住, 東南アジア研究, 40巻1号, 23-41
- 鈴木 玲治, 竹田 晋也, フラマウンティン (2007) : 焼畑土地利用の履歴と休閑地の植生回復状況 —ミャンマー・バゴー山地におけるカレン焼畑の事例—, 東南アジア研究, 45巻3号, 343-358
- 高谷 紀夫 (1998) : シャンの行方, 東南アジア研究, 35巻4号, 644-662
- 田坂敏雄 (1991) : 「熱帯林破壊と貧困化の経済学」, お茶の水書房, 279p
- Tribal Museum (2004) : "The hill tribes of Thailand", Technical Service Club Tribal Museum, 84p
- Nomoto, S. (2003) : Decreases in the number of foggy days in Thailand and Japan, and possible causes, Journal of International Economic Studies, 17, 13-28
- 速水 洋子 (2007) : 家と家をつなぐ —バゴー山地カレン焼畑村から—, 東南アジア研究, 45巻3号, 359-381
- 深尾 葉子 (2004) : ゴムが変えた盆地世界 —雲南・西双版纳の漢族移民とその周辺—, 東南アジア研究, 42巻3号, 294-327
- Perve, E. (2006) : "The hill tribes living in the Northern Thailand", Alligator Service Co Ltd, 100p
- 増野 高史 (2005) : 焼畑から常畑へ —タイ北部の山地民, 「熱帯アジアの森の民」池谷和信編, 人文書院, 148-178
- 村上 忠良 (1998) : タイ国境地域におけるシャンの民族内関係 —見習僧の出家式を事例に—, 東南アジア研究, 35巻4号, 663-683
- 吉野 晃 (1998) : 焼畑に伴う移住と祖先の移住 —タイのミエン・ヤオ族における移住とエスニシティー—, 東南アジア研究, 35巻4号, 759-776